

25・S1

# 国語

## 注意事項

1. 「開始」の合図があるまで、問題をひらいてはいけません。
2. 問題は  から  まで、16ページまであります。
3. テストの内容に関する質問は一切できません。
4. 答えはすべて解答用紙に記入してください。
5. 気分が悪くなったとき、筆記用具を床に落としたときなどは、手を挙げて監督者に合図してください。
6. 「終了」の合図があったら、すぐに筆記用具を置いて、監督者の指示にしたがってください。

受験番号

氏名



一、——118のひらがなは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。(送りがなも書くこと)

- 1 年末に地域のほうし活動に参加する。
- 2 地震で地面がりゆうきした。
- 3 環境おせんの改善に取り組む。
- 4 彼はれいぎ正しい人間だ。
- 5 悩んだ末に小論文の一部をさくじよした。
- 6 のうしゆくされたジュースを飲む。
- 7 彼女は軽く会釈をして通り過ぎた。
- 8 代表チームはわずか一点差で惜敗した。

## 二、次の文章を読んで後の問に答えなさい。

「佐々木ひかり」は美しい姉への劣等感から、良い学校に入ることと自分の価値を見出そうと一生懸命勉強してきた。しかし確実とされていた第一志望に合格できず、思いもよらず新設の明泉女子高校に進学することになった。同級生には著名なヴァイオリニストの娘「御木元 玲」がいたが、彼女も第一志望の音大付属高校の入学がかなわず、その挫折感から周囲との交わりを拒んでいた。

私は変われるのか。新しい私になれるのか。それとも、女子高校に進学しても、やっぱり勉強ができてクラス委員をする佐々木ひかりなのか。興味も迷いも隠してそろそろと教室に足を踏み入れた入学式の日、<sup>①</sup>答は出ていた。

クラスメイトたちはみんなかわいかった。新しい制服に袖を通したばかりのはずなのに、もういきいきと女子高校生を体現しているように見えた。まぶしくて、思わず目を細めてしまった。そして、こっそりため息をついた。みんな、春だ。

春、というならこれ以上の春があっただろうか。曲がりなりにも受験を終え、入学を許可された女子高校の教室。校風は穏やかで自由で、ががつしたところがない。大学受験まではまだ三年もある。さあ、これから春を謳歌しましょうといわんばかりの境遇ではないか。

でも、もちろん私は顔を上げていた。だいじょうぶ、ちゃんと役割を知っている。ここでも今まで通りしっかり者として生きればいい。率先してクラス委員を引き受け、まとめ役にまわろう。それで、安泰だ。

明泉に入って御木元さんを初めて見たとき、だからうれしかった。ここにも冬の人がいる、と直感した。わざと雪の日を選んで、道のまんなかにすくくと立っている少女。そんな印象だった。顔立ちは整ってきれいなのに、長い黒髪を後ろでひとつに束ね、手入れのされていない眉を上げ、制服の調節にも無頓着らしく中途半端に長いスカートでぼつんと立っている。クラスの輪から外れ、いつもひとりだった。

あんなふうに孤立していられるのはただ者ではないだろう。こんな春めいた場所Wで冬をまどっていられるのには何かきつとわけがある。それを暴きたいわけではなかった。ただ私と同類かもしれないと思ってうれしかったのだ。彼女が、有名なヴァイオリニスト、御木元響の娘だなんて知らなかった頃の話だ。

二年で同じクラスになってからも、彼女のことをぜんぜんわからなかった。私はやっぱり今年もクラス委員だ。何かあるたびに彼女を巻き込もうとしてみるのだけど、まるでのってこない。ますます孤立していくようだった。私は人に頼られて初めて存在意義を確認しているようなところがあるから、まわりに人がいてくれないとどうも調子が出ない。だから彼女の、少しも人と交わろうとしない頑なさが気になった。どういう人なんだろう、と素朴な疑問を抱いた。

御木元さんと同じ中学だったというあやちゃんが、彼女が名前の様付けて「玲さま」と呼ばれていたことを教えてくれた。

「玲さまはちょっと普通じゃなかった。お母さんの海外への演奏旅行についていくとかで平気で一か月くらい学校を休んじゃうんだから」

なるほど。彼女が学校生活に無関心なのは、私が勝負するのはここではありません、と宣言しているようなもの、友達なんか重要じゃないってことだ。

切り札を持っているから、いつ<sup>X</sup>春が来ても、いつ過ぎていっても、気にしないでいられるのだろう。

「でもね、中学の頃の玲さまはもっと明るくてのびのびしてたと思うんだよね」

あやちゃんは首を捻<sup>ひね</sup>っていた。明るく、のびのび、か。級友たちからすれば、今の私もそんなふうに見えているのではないか。

私には切り札はない。だからこそ、ちゃんと役割をわきまえて、それをまっとうしている。明るく、のびのびと。

秋に、ちょっとした出来事があった。御木元さんがクラス対抗の合唱コンクールの指揮者に選ばれたのだ。彼女が指名されたのは、音楽家の娘だという噂が広まっていたせいもあるけれど、その協調性のなさを腹立たしく思っている人もけっこういたからだと思う。

明泉という学校は行事が多い。合唱コンクールはちょうど文化祭が終わってひと息つこうとしたタイミングで行われるので、つい受け流す恰好になってしまふ。クラス委員としてはなるべく盛り上げたいとは思うものの、誰も真剣に取り組もうとはしない行事だった。

いやいや引き受けたに違いないのに、御木元さんは途轍<sup>とてつ</sup>もなかった。特別としかいいようのない光を私たちに見せてくれた。彼女にしてみれば、特別なつもりもなかったのかもしれない。指揮者になったことで<sup>④</sup>光が漏れた、そんな感じだった。

級友たちをどうにか引張っていくために、<sup>b</sup>四苦八苦する彼女は、自分では歌わず、指揮と指導に徹していた。それでも彼女が各パートの出だしや山場を歌って示す、その歌声に触れただけで身体に鳥肌が立つようなことが何度もあった。そういうとき、私は昂揚し、<sup>c</sup>かえってうまく声が出なくなってしまう。光り輝くような声の主を、ただ見つめていることしかできなかった。

練習を重ねるにつれ、歌うことってこんなに奥が深いのかと目が覚めるようだった。ときたまみんなの声がぴたりと重なると、合唱の楽しさに触れることができた気がして、よろこびがこみ上げた。

ただし、この人を指揮者にしてしまったのは間違いだったとたぶんクラス全員が思っていただろう。指揮者は歌えない。御木元玲の声を封印してしまったのはあまりにももったいなかったという後悔。それに、彼女の歌がうますぎて自分が歌う気がなくなってしまうという子もいたし、歌い手としては素晴らしいけれど——素晴らしいからこそ——指導者としては不向きだなどという声も挙がっていた。

御木元さんは、級友たちがやる気のないふりをしていてかと思っていたみたいだ。少しは燻<sup>d</sup>っているはずの、歌いたい気持ちを刺激しようとした。まずは声を出させるところから始め、声を合わせたときの気持ちよさを私たちに教えようとした。残念ながらポーズなんかじゃなく、みんなほんとうにやる気がなかったのだけれど。そして、こっそりやる気のある何人かにして、彼女の要求にしっかり応えられるような力量はなかった。

私も小さい頃からピアノを習っていてそこそこ弾けたから多少の音感はあるはずだったのに、御木元さんのハーモニーの追求は生半可じゃなかった。否定されるような気分になった子がいたのもわかる。<sup>A</sup>私たちにそこまで求めてもしかたないと思うよ、と何度いいなくなったことか。無理だということがわからないのか、わかっていても妥協ができないのか、彼女の指導は厳しくて、ただでさえ集まりが悪かったのに回を追うごとに人が集まらなくなった。<sup>B</sup>しかないよ、と私は思った。今度はクラスメイトたちに対して。御木元さんにはこうすることしかできない。音楽に関して、歌うことに関しては、こんなふうにながっぷり四つに組む以外に彼女には手はないんだ。

私はそれをクラスメイトたちに伝えられなかった。彼女の歌声に、そして合唱を導こうとする情熱に圧倒されて、すごい、すごい、この人はすごい、と涙が出そうだったのだ。御木元さんのことが猛烈に羨ましかった。敵わない。歌ではもちろん、<sup>E</sup>人間としてぜんぜん敵わない。勉強そのものが好きかわけでもないのに勉強してクラス委員をやっているだけじゃ、だめだ。それは勤勉ではなく、むしろサボタージュなんじゃないか。初めから<sup>F</sup>春を捨ててしまうのは、逃げているってことなんじゃないか。

でも、どうすればいいのかわからなかった。ずっと人のまとめ役で、今さら自分にも何かほしい、何者かになりたいなんて、いったい何をどうすればいいのだろう。べつにいちばんにならなくなったっていい。ただ一所懸命になれる何かがほしくてたまらなくなった。

合唱コンクールの前後、無口になってしまった私を友人たちが気遣ってくれた。どうかしたの、とか、ひかりらしくないよ元気出してよ、とか、たくさんの子が声をかけてくれた。やりにくいよね御木元さんて、なんて眉をひそめる子もいた。

「なんか、わかるよ、ひかりの気持ち」

そうつぶやいたのは千夏だった。千夏は合唱コンクールでピアノを担当していた。お気楽そうな千夏に何がわかるのかと思ったけれど、意外に真剣な目を見たら何もいえなくなってしまった。

「御木元さんを見ると、自分にはなんにもないんだな、ってつくづく思うよ」

千夏はいい、それからにっこりと笑った。

「それなのに、不思議なんだ、見ていたいんだよ。御木元さんにはどんどん進んで行ってほしいし、それをずっと見ていたい気持ちになるんだ」

半分開らい、同じ気持ちだ。でもあとの半分では、羨んでいる。春もなく夏も秋も冬も無視して、歌うことで何の迷いもなく進んでいける御木元玲と、なんにもない私。

「なんにもないって思わされて、平気？」

聞くと、ちよつと考えてから千夏は答えた。

「……これからじゃないかな。なんにもないんだから。これからなんじゃないの、あたしたち」

のんきだな、と思う。あたしたち、と一緒にされたのもなんだか面白くない。ただ、これから、という千夏の言葉に賭けてみたい気もした。そうでなければ、私は一生冬のまま、<sup>Z</sup>春から目を逸らして生きていかなければならない。

問1 Ⅱ a・bの意味として最も適当なものをそれぞれ選び記号で答えなさい。

a 「安泰」

- ア 完璧であるということ。
- イ 満足できるということ。
- ウ 穏やかで無事なこと。
- エ 望みがかなうこと。
- オ いやいや受け入れること。

b 「四苦八苦」

- ア どうにも逃げ場がないこと。
- イ 非常に大変な思いをすること。
- ウ 大いにあわてること。
- エ 深く考えこむこと。
- オ 希望が見いだせないこと。

問2 ① 「答は出ていた」とあるが、「答」とは何か、三十字以内で説明しなさい。

問3 ——— ② 「まわりに人がいてくれないとどうも調子が出ない」のはなぜか説明しなさい。

問4 ——— ③ 「切り札を持っている」とあるが、ここではどういうことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア 周囲から孤立してもうろたえることのないほど、自己中心的であるということ。

イ 他者から頼られることによって、期待以上の優れた能力を発揮できるということ。

ウ 学校生活や友人関係以外に、自分の価値を実感できる場所があるということ。

エ 周囲の人間を音楽の力で思うように動かすことができるということ。

オ 必要な場面では、いつでも自分の考えや役割を変化させる柔軟性をもっているということ。

問5 ——— ④ 「光が漏れた」とは、ここでは具体的にどういうことを指しているのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア 孤立していた「御木元さん」が合唱コンクールの指揮者になったことで、これまで隠れていたクラスメイトの彼女への嫉妬心が浮き彫りになったということ。

イ 有名音楽家を母に持つ「御木元さん」が、自分の才能を意図的に隠して目立たないように生活していたことが、クラスメイトに露見してしまったということ。

ウ 指揮者である「御木元さん」を盛り立てることが、まとめ役である自分の力を皆に認めさせることになること、「ひかり」が気付いたということ。

エ 合唱コンクールの指揮者になることで、今まで孤立していた「御木元さん」の音楽の才能が初めてクラスメイトに明らかになったということ。

オ 指揮者としての指導に苦戦する「御木元さん」の様子から、これまで皆の期待で隠されていた彼女の才能の限界が明らかになったということ。

問6 ——— A 「私たちにそこまで求めてもしかたないと思うよ」、——— B 「しかたないよ、と私は思った」とあるが、それぞれの「しかたない」の心情の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

Aの「しかたない」は、「御木元さん」が私たちに求める能力の高さに対する諦めであり、Bの「しかたない」は、回を重ねるごとに練習に人が集まらなくなることも当然であるという気持ち。

I Aの「しかたない」は、「私」たちに「御木本さん」の厳しい指導に答えるだけの意欲や力がないことへの諦めであり、Bの「しかたない」は、音楽や歌うことに対して真剣な「御木元さん」は厳しい指導しかできず、クラスメイトたちも諦めて受け止めるしかないという気持ち。

ウ Aの「しかたない」は、クラスメイトに過剰に成果を求める「御木元さん」に対する諦めであり、Bの「しかたない」は、音楽に全力で向き合う「御木元さん」が、圧倒するような情熱で指導を行うことに対するしらけた気持ち。

E Aの「しかたない」は、音楽への真剣な気持ちから指導も妥協できない「御木元さん」に対する諦めであり、Bの「しかたない」は、そうした「御木元さん」の姿勢にクラスメイトたちがついて行けずに嫌気を感じてしまうことは避けられなかったという気持ち。

オ Aの「しかたない」は、「御木元さん」の圧倒的な熱意に比して、やる気のないクラスメイトたちが次々と練習に出なくなっていくことへの諦めであり、Bの「しかたない」は、素晴らしい歌声と指導力を示す「御木元さん」に対して強烈な憧れの意識を持つのは当たり前であるという気持ち。

問7 ——— ⑤ 「人間としてぜんぜん敵わない」とあるが、この時の「ひかり」の心情の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

A 周囲と上手く過ごすために、ポーズで勉強やクラスの役割を引き受けて立場を守ろうとする自分と異なり、自身の中にある譲れないもののために妥協せず真剣に取り組む「御木元さん」の姿に圧倒されている。

I 周りからの支持や期待を常に気にして迷ってばかりいる自分と比べると、クラスメイトからの抗議や嫉妬をもともせず、自分のやり方だけを信じて進むとする「御木元さん」の意固地さに驚きを隠せないでいる。

ウ 第一志望ではなかった高校での毎日に不満を抱き、煮え切らない思いを抱いていた自分とは違い、音楽の道で生きていく覚悟を決めて密かに行動に移していた「御木元さん」のひたむきさを知り、自分の弱さを情けなく思っている。

エ 合唱コンクールの指揮者としての重圧に耐えて、入賞を目指して必死に努力している「御木元さん」を目の当たりにして、その才能を妬むばかりで協力しようとしなかった自分や他のクラスメイト達の狭量な心を恥ずかしく思っている。

オ 隠していた音楽の才能を見せつけることでクラスメイトの評価を一気に上げた「御木元さん」と、合唱コンクールを新しい自分を発見する場所として活かすことができなかった自分を比べ、彼女の見事な手腕に感心している。

問8 次の文章は、生徒が本文を読んで「春」について意見交換をした会話文である。次の会話文を読んで、後の問いに答えなさい。

Aさん この文章では何力所かで「春」という言葉が使われていますね。

Bさん 本当だ。でも全ての「春」は同じ事柄を指しているのだろうか。

Cさん それぞれの「春」は内容として異なる部分があるように思います。たとえば傍線部Wの「春」は、を表しているのではないかな。

Dさん なるほど。傍線部Wの「春」は、高校時代ならではの経験だね。

Aさん 傍線部Xの「春」も傍線部Wの「春」と同じ事柄を表していると考えられますね。

Cさん 「ひかり」は、自分と「御木元さん」にとっては意識的に遠いものとして傍線部Xの「春」を捉えているのではないかな。

Dさん 傍線部Yの「春」はを指していると思います。

Bさん 傍線部Yの「春」は、「御木元さん」には身近で、常に準備されているものだったから、恵まれた環境や豊かな才能を持つ「御木元さん」を

クラスメイト達が羨むのも無理はないですね。

Dさん 傍線部Zの「春」も傍線部Yの「春」と同じ内容を指しているよね。

Aさん 「ひかり」は 傍線部Zの「春」が自分にならないことで、焦りを覚えている部分があるのではないかと感じます。

会話文中の空欄、に入るものとして最も適当なものを、次の選択肢の中から選んでそれぞれ答えなさい。

ア これまでの努力が全て報われる場面

イ 情熱を傾け一生懸命になれる何か

ウ 人生を明るくのびのびと謳歌すること

エ 極限まで自分を追い込んでたどり着く場所

オ 自分を受け入れてくれる友人たちの存在



### 三、次の文章を読んで後の問に答えなさい。

ボルネオ島の熱帯雨林に暮らす狩猟採集民プナンの社会には、貧富の格差がありません。どういふことが説明していきましよう。

これまで、動物を飼育したり、作物を栽培したりしてこなかったのがプナンです。彼らは、周囲の森や川の中に存在する野生生物を糧として暮らしています。彼らが最も好物とするのはヒゲイノシシです。シカやホエジカ、マメジカなども捕まえます。リーフモンキー、カニクイザル、ブタオザル、テナガザルなどの猿類も狩って食べます。その他に、ジャコウネコ、ヤマアラシなどの夜行性動物や、サイチョウやコシアカキジなどの鳥類、川魚の類にいたるまで、周囲には動物がいつも豊富にいます。そのため「食べ物貯めておく」という発想はありません。

プナンは、吹き矢やライフル銃などの武器を用いたり、場合によっては猟犬を使ったり、罠を仕掛けたりして野生の動植物を狩ったり釣ったり採集したりします。そして獲物を狩猟キャンプや居住地などの生活の場に持ち帰った時は、そこにいる全ての人たちが消費するのが基本です。

たとえば、ある家族が狩猟に行つて、ヒゲイノシシが獲れたとしましょう。獲物は狩猟キャンプに持ち帰られたあとに、一緒に暮らしている別の家族にも分け与えられます。獲物はいつも狩猟キャンプの全員で分かち合わなければならぬのです。そうすると、狩猟に行つて頑張つて獲物を獲った家族からすれば損ではないかと思ふかもしれませんが、その家族にもメリットがもちろんあります。そうすることで、いづれ食べ物がない時に、別の家族のところで何の断りもなく食べることが許されるのです。

これを①シエアリング・エコノミーと言います。シエアとは「みんなで共有する」ことであり、それは、個人的なものを所有することの否定です。逆に言えば、プナンは、誰かがものを独り占めすることを認めないのです。私たちは自分が稼いだ給料や手に入れたモノを家族でもない他人と共有することはめつたにありませんから、彼らの暮らしぶりには不思議な印象を受けるかもしれません。

彼らはなぜ②そんなことをするのでしょうか？ それは、一言で言えば、全員が生き残るためです。目の前にあるものをそこにいる全ての人で分かち合つて、全員が食べて、生き残ることができるようになっているのです。強者だけが生き残るのではなく、みんなで生き残るというのがプナンのやり方です。

ではそうした③シエアする心、分かち合う精神というものを、はたしてプナンは生まれながら持っているのでしょうか？ 私たちが感じるような「ひとりじめしたい！」という気持ちはないのでしょうか？ プナンのフィールドワークで私自身が経験したエピソードを取り上げてみましょう。

ある時、私は幼児に、袋に二〇個くらい入った飴玉あめを与えました。彼女のそばに他の子どもたちがやってきて、飴玉を欲しそうに眺めていましたが、彼女は飴をひとつ取り出して舐めた後もその袋を握りしめて放そうとはしませんでした。

その時です。幼児の母親がやって来ました。母親は、特に叱るような口調ではなかったのですが、彼女に、飴玉を他の子どもたちに分け与えるように言ったのです。その幼児は最初、怪訝な顔をしていたのですが、母親の言うままに飴玉を人数分を均分して、欲しそうに見ていた子どもたちにも分け与えたのです。子どもたちは、「ありがとう」とも何とも言わずに飴玉を受け取りました。

このエピソードから、プナンでも、幼児期には独占欲のようなものがあることが分かるでしょう。そのような独占欲を、周囲の大人や親たちが早い時期から殺いでいくのです。そうした経験を経て、子どもたちは、シェアリング・エコノミーの社会的な実践者となっていくます。

人間は誰も生まれながらに独占欲を持っています。しかしプナン社会では、その独占欲が否定されます。幼い頃から独り占めする心が否定され、周囲の人々に均等にモノを配るという分かち合いの精神が植え付けられていくのです。個人で所有すること、ものを占有することは、社会的な「悪」であると考えみなされるようになります。

社会生活の場面でプナンの人たちは、分かち合う精神を基本にしながら人間関係を紡いでいきます。少なくとも、分かち合うことによって、そこにいる誰もが食べて生き残ることができるような社会をつくり上げてきたのです。その意味で、プナンにとって「シェアリング」とは、命を懸けて取り組む行為なのだと言えるでしょう。

こうしたプナンのシェアリング・エコノミーは、平等主義的な社会を生み出しています。アメリカの人類学者エルマン・サーヴィスは、人類を、「バンド社会」、「部族社会」、「首長制社会」、「未開」国家の四つの発展段階の中に位置づけましたが、プナンはこのうちの「バンド社会」にあたります。「バンド社会」とは、家族的、平等的で、構造的には未分化で、分かち合い意識の強い社会です。そこでは、誰もが等しくものを分け与えられ、誰もが等しく扱われます。特定の誰かに富が偏ることはありません。逆に言えば、特定の人たちだけが豊かさや、逆に貧しさを経験するのではない、貧富の格差のない平等主義を旨とする社会です。

誰かが富を独占すれば、「have」と「have not」、つまり「持つ者」と「持たざる者」に二極化して、貧富の格差が生み出されるでしょう。プナンには、とても不思議なことに、「持つ者」は存在しません。金持ちはおらず、誰もが「持たざる者」なのです。私たちの感覚で言えば、みな平等に貧しいと言ってもらいかもしれません。いくばくかでもお金を財布の中に入れて持ち歩くべきだと考える私たちの常識からすれば驚くべきことですが、プナンはふだん、ポケットの中にお金などを持ち歩きません。

シェアリング・エコノミーが徹底されることによって、誰もが何も持たないという「無所有の原理」に支えられて、平等主義的な社会が作られてきたのです。この原理のもとで、プナンはとてもさばさばして暮らしているように見えます。



問3

③「シエアーする心、分かち合う精神というものを、はたしてプナンは生まれながら持っているのでしょうか」という問いに対する答えとして  
適当でないものを次の選択肢から選び、記号で答えなさい。

- ア プナンでは、子どもたちの「ひとりじめしたい！」という気持ちをなくしていくような体験を、大人たちが幼少期から繰り返しさせている。
- イ プナンの人々は、教育によって、個人でものを所有・占有することが社会的な「悪」であると認識するようになっていく。
- ウ プナンの人々は、生まれながらにして他者とものを分け合う精神を持ち、子どもたちはその精神を大人たちから肯定されながら成長していく。
- エ プナンの社会では、幼少期から独占欲が否定され、周囲の人々に均等にものを分け与える精神が植え付けられていく。
- オ プナンの人々は、幼児期は独占欲のようなものはあるが、周囲の大人たちが早期に殺いでいき、そうした経験を通してシエアーを実践する存在と  
なっていく。

問4

④「プナンにとって「シエアーリング」とは、命を懸けて取り組む行為なのだ」とあるが、なぜ「命を懸けて取り組む」のか。その理由として最も  
も適当なものを次の選択肢中から選び、記号で答えなさい。

- ア プナンの人々が社会のなかで自分の存在意義を証明するには、他者との分かち合いを重視するしかなかったから。
- イ 社会全体が生き残るために、プナンでは分かち合いに必要な個人の能力が常に試されていたから。
- ウ プナンの人間関係は、集団全体の利益より、個人の独占欲を優先することでかろうじて築かれてきたものだから。
- エ プナンでは、個人の利益より分かち合いを優先することが、社会全体で生き残るための方法だったから。
- オ プナンの社会がシエアーリングを行わざるを得なかったのは、狩猟採集によって生活を維持しなければならなかったから。

問5 ─── ⑤「プナンのシェアリング・エコノミーは、平等主義的な社会を生みだしています」とあるが、なぜ「シェアリング・エコノミー」は

「平等主義的な社会」を生み出すのか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から選び、記号で答えなさい。

ア 社会を「持つ者」と「持たざる者」とに正確に分けることによって、富を必要とする者と不要な者が明らかになるから。

イ 誰もが所有せず等しく扱われることで、一部に富が集中することなく、貧富の格差の発生を避けられるから。

ウ プナンの社会では、獲物を個人の生活の場に持ち帰り消費するためには、周囲の全ての人たちの許可を得るのが基本だから。

エ 富が平等に分けられることで、余剰の利益を活用して、さらなる富の拡大を図るチャンスも等しく与えられるから。

オ プナンでは誰もが貧しさや豊かさを平等に体験することによって、貧富の格差を拒絶する意識を高めているから。

問6 ─── 「個人が蓄財し、富を蓄積すること」とあるが、個人が富を蓄積する社会のメリットとデメリットを、あなたの具体的な体験や見聞を含めて

一五〇字から二〇〇字で書きなさい。

【以上】



受験 番号		名前	
----------	--	----	--

一

1 ほろし	2 りゆうき	3 おせん	4 れいぎ
5 ちくじよ	6 のうしゆく	7 会釈	8 惜敗

二

問 1	a	b
問 2		
問 3		
問 4	問 5	問 6
問 7		
問 8	I	II

三

問 1	
問 2	
問 3	問 4
問 5	
問 6	

受験 番号		名前	
----------	--	----	--

1 ほうし 奉仕	2 りゅうき 隆起	3 おせん 汚染	4 れいぎ 礼儀
5 さくじょ 削除	6 のうしゆく 濃縮	7 会釈 えしやく	8 惜敗 せきはい

問 1	a ウ	b イ
問 2	今まです通り自分の役割をわきまえ てしっかかり者として生きること。	
問 3	私は人に頼られて初めて自分の存在意義を確認しているから。	
問 4	ウ	問 5 エ
問 8	I ウ	II イ
	問 6 イ	問 7 ア

問 1	ウ
問 2	誰かがものだけを独り占めすることを認めないということ。
問 3	ウ
問 4	エ
問 5	イ
問 6	個人間の富の格差が拡大して、富が一部に集 中し、弱い立場の者の人権が軽んじられるこ とがある点である。例えば、発展途上国には、 フアストフアツシヨンのような先進国向け 工業生産のため、に劣悪な環境で働くことを強 いられて、いる人々が、いる。個人が富を蓄積する社会のメリツトは、個 人の努力が報われることで、人々が向上心を 持つて生活し、新たな技術等が生まれる土壌 となりうる点である。一方で、デメリツトは 個人の間の富の格差が拡大して、富が一部に集 中し、弱い立場の者の人権が軽んじられるこ とがある点である。例えば、発展途上国には、 フアストフアツシヨンのような先進国向け 工業生産のため、に劣悪な環境で働くことを強 いられて、いる人々が、いる。個人が富を蓄積する社会のメリツトは、個